

大学生は講義・演習等の何に満足し、何が不満なのか

梶 田 勲 一（高等教育教授システム開発センター）

【学生・大学の変化と新たな大学教育活動】

わが国においても、近年、大学における教育活動のあり方の抜本的な改善・改革が求められている。

学生そのものの基本的あり方が昔とは大きく違うのであるから、これは当然のことと言ってよい。今は同年齢層の40パーセント以上が大学・短大に進むという「高等教育大衆化」の時代である。また学生の多くが、小・中・高校生の時期を通じ、物質的には恵まれた生活をし、勉強や成績のことばかりに関心を奪われ、広い体験を欠いたまま、個人生活に閉じこもりがちで育つという「純粹培養的育ちの一般化」が見られる時代である。30年少し前の高度経済成長期以前の大学と、さらには文字通りのエリート教育機関であった第2次世界大戦以前の大学・高等専門学校等と、同じスタイルで学生に接し、指導していくわけにはいかないのは明明白白であろう。

これに加え、時代的進展に伴って、わが国の大学の基本的な研究・教育課題も変化してきている。とりわけ、欧米の先進的な学問・技術の探索・受容から日本の現実に根ざした研究・開発の創造的展開へと変革を余儀なくされている点など、大学でどのような教育活動をするか、それによって学生にどのような能力を形成していくべきか、という問題と深く関わってこざるを得ない。

こうした問題意識の点では、現在多くの関係者がほぼ同一の認識を持っているであろうが、講義や演習などといった教育活動の具体的なあり方をどのように変えればよいのか、ということになるとイメージは必ずしも明確でない。教官がシラバスを作って講義・演習しさえすれば抜本的な改善・改革が実現できる、といった簡単な話でないことは確かである。講義や演習の現実のあり方自体、担当教官の性格や力量、大学教育に関する基本イメージの違い等を反映して、まさに千差万別である。その上、そうした現実をどのような点で乗り越えていくかについて議論するとしても、その方向性は多様にならざるを得ないのである。

このため、どのような具体的手だてを教育活動に導入すれば改善・改革となるのか、といった単純な問いの立て方は、少なくとも現時点においては、必ずしも有効でない。例えば、ビデオやOHP等といった教育機器の導入によって教育のあり方の改善・改革がもたらされるといった発想に対しても、教育機器の使用によってそれまで以上に有効適切な情報伝達が可能になるだろうといった期待がある反面、教官と学生との間の直接的な人間的触れ合いが阻害されてよそよそしいものとなり、教官の研究や学問にかける思いや熱意、問題意識や方向感覚等が伝わりにくくなる、という不安が強く表明されることになるのである。

この小論では、大学における教育活動をどのように改善・改革していくべきか、という問題に対して、具体的な改善・改革の方策を直接的に論ずるのでなく、現実の教育活動のどのような点に学生は満足し、あるいは不満を持っているか、という問題をめぐって考えてみたい。改善・改革の具体的な方策が現時点において一般的な形で存在するかどうかということは疑問であるとしても、どのような領域において、どのような方向で、それぞれの教官が自らの教育活動のあり方の変革を図っていけばいいのか、という点について基本的な見取り図を作成する上で、学生が講義・演習等に対して現に持つ満足・不満足について認識しておくことが重要な基盤になるのではないかと考えるからである。

【調査の概要】

われわれは、1995年の2月から3月にかけて、京都大学・大阪大学・大阪外国語大学の学生を対象に、このための意識調査を行ってみた。学部学生だけでも合計658人の学生に被調査者として協力いただくことができた。

回答を求めた項目のうち、本小論に関係のある部分は次のものである。

1. あなたがこの大学で受けた講義・演習・実験実習等についてうかがいます。

<1-1> この大学であなたが受けた講義や演習等の中で、あなたにとって一番あなたのためになったと思う

ものは何でしたか？

<1-2> それはどのような意味であなた自身のためになったと考えていますか？

<1-3> その講義や演習等の時間、指導や学習の仕方などに何か特徴がありましたか？それは具体的にどんなことですか？

<1-4> その他にあなた自身のためになったと思う講義や演習等は何でしたか？

<1-5> それはどのような意味であなた自身のためになったと考えていますか？

<1-6> その講義や演習等の時間、指導や学習の仕方などに何か特徴がありましたか？それは具体的にどんなことですか？

<1-7> あなたはこの大学での講義や演習等の内容がよく理解できますか？

[よく理解できる、大体は理解できる、時々理解が困難、多くは理解が困難]

<1-8> あなたがこの大学の講義や演習等を経験して、大学での教育や指導は今後このようなものであってほしい、と思う希望なり注文なりがあれば書いてください。

こうした諸項目に対して学生達が自由記述の形で回答してくれた内容を検討してみることにしたい。ただし余にも個別的で具体的過ぎると思われるものは、ここには取り上げないことにする。またここでは、回答類型ごとの数値的な多少を問うのではなく、回答タイプの広がりとその全般的な構造を見ていくことにしたい。

【どのような講義・演習等に満足しているか】

学生達が、「自分のためになったと思う講義・演習等」の「ためになった」理由として挙げているところ(<1-2><1-5>)を中心にまとめてみると、講義等に満足感を持つのは次のような条件によるものと考えることができる。第一は、

1.0 <学生達自身にとって有効・適切である>

という形で大きく括ることのできるような諸条件である。具体的には、まず、

1.1 <自分の興味や知的欲求に合うものであった>

という形のものである。例えば「知的好奇心が満足された」「自分の関心にピッタリの講義内容だった」「興味を持っていたところについて詳しく話してもらえた」などである。これらは、教育活動自体が本来備えていなくてはならない学習者の興味、関心との適合性という基盤的な要件に関わるものである。

これに加えて、もっと具体的現実的な有効性を指摘するものもある。具体的には、

1.2 <自分の将来に役立つ>

というものなど典型的であろう。例えば、「将来の自分の仕事が具体的にイメージできるようになった」「将来の資格取得に役立つ」「自分の将来の可能性が見えてきたような気がする」「社会に出てから役立つ内容であった」などである。これらは、現在の大学が医者や弁護士、学校教師、等々といった高度な専門職業人の養成をその使命のひとつとしていることから言って、大学教育の有効・適切性にとって重要な視点であろう。

さらに、学生達にとっては、自分の興味、関心や将来の志望に適合した学習を進めていく中で、自分自身の姿の反省、あるいは探索に導かれることもある。こうした面での合議、演習等に対する満足観を語るものを、

1.3 <これまでの自分の振り返りができる>

としてまとめておくことにしたい。例えばこれは、「自分のことを見つめることができた」「自分の生き方について考えることができた」「自分を客観的に見れるようになった」「自分について深く理解できるようになったと思う」などである。こうした面でも大学教育の効果は、多くの学生達にとって大学が社会に巣立つ前の仕上げの時期であることを考えるならば、長い生涯にわたっての人格形成の基礎をなすものとして重要であろう。さらには、

1.4 <自分の实际生活に役立つ>

というものがある。例えば、「自分のからだの健康にかかわることを学び取れた」「日常生活に密接に関係する内容だった」というものである。

ところで、大学は伝統的に学問・研究の場として性格づけられてきた。こうした点での満足感を披瀝する学生も少なくない。これをここでは、

2.0 <学問・研究の世界に目覚めることができた>

という形で括っておくことにしよう。ここではまず、

2.1 <新たな知的世界に意識が広がった>

という形での満足感がある。例えば、「高校までに勉強した見方を一変させてくれた」「高校までは重視しなかった事実が実は非常に大切なものであることを分かせられた」といった形で、大学教育で初めて目覚めた世界のあることを語ってくれるものがある。もっと一般的なものとして「自分のものとは違う世界に触れた」「自分のこれまでの興味・関心の世界からは出てこないものに目を開かれた」などもある。これをもう少し進めると、

2.2 <新たに何かを考えるきっかけになった>

という意識へと発展していくであろう。例えば、「身の回りの事実を本質的な地点から考えてみるきっかけになった」「人や社会に対して（あるいは歴史に対して、〇〇の国に大して、周囲の自然に対して）、深い視点から考えてみることができるようになった」「新聞やテレビなどで騒がれている問題を、理性的に、総合的な視点から考えてみるきっかけになった」などである。さらにこの上に、

2.3 <自分自身が新たな知的能力を獲得した>

という感想を語るものが続くことになる。例えば、「教官が口頭で言ったことを自分なりの言葉でまとめて理解できるようになった」「専門家の話している内容についてある程度わかるようになった」「論理的思考、体系的思考が習得できた」などである。さらに進んで、

2.4 <学問的研究世界に目が開かれた>

というものがある。例えば、「学問というものが少しわかってきた」「研究というもののやり方を入口だけでも知ることができた」「フィールドワークの楽しさと大変さがわかった」「ひとつの法則を見つけ出す過程を1年かけて講義してくれ、とても面白かった。すごい先生がいるものだった」「日常的に役立たない学問は無用と考えていたが、そうでないことがわかった」などである。現在においても大学が伝統的な役割をきちんと果たしている部分を持つということを如実にうかがうことのできる心強い回答と言ってよい。

さて、以上に述べたところに加えて、

3.0 <教官の熱意・人柄などが良い>

といったカテゴリーで括れる回答群を見落とすことはできない。具体的には、これをまたいくつかの回答類型に分けてみることができるであろう。まず、

3.1 <教官の熱意が伝わってくる>

というものである。例えば、「教官の真剣さが伝わってきた」「一生懸命教えてくれた」「手抜きが無く、毎回緊張したものであった」「教官の自分の研究に対する熱意が伝わってきた」などである。また、

3.1 <教官の学問・人柄に惹かれる>

というものもある。例えば、「教官の学問の深さに感銘を受けた」「尊敬できる教官との出会いを持つことができた」「教官が尊敬できる人であり、自分もあのような人になりたいと思う」などである。さらにこれらに加えて、

3.3 <教官の語り口、話術が良い>

というものがある。例えば「話がおもしろい」「話術が巧みで、あっという間に時間が過ぎる」「自分の実体験や失敗談を語ってくれる」「個人的所見を語ってくれる」「最近話題になっている問題を積極的に取り上げようとしてくれる」などである。以上の点に加えて、教官の持つさまざまな形で個人的特性を挙げるものがある。これは、

3.4 <教官に個人的な魅力がある>

という形でまとめておくことにしたい。例えば、「おしゃれで感じが良い」「知的なスマートさが感じれる」「ユニークな個性の人である」などである。

ところで、こうした「ためになる」講義や演習等の具体的な活動形態はどうであったのであろうか。項目<1-3><1-6>への回答として挙げられたところも加えて、「満足できる講義・演習等」の具体的な条件を、活動形態の面からも見てみることにしたい。

まず第一に挙げられるのは、

4.0 <学生の自主性・参画意識が満足される活動形態であった>

という形で括れる回答群であろう。これをまたいくつかのカテゴリーに分けてみると、非常に基盤的な条件とも言えるものとして

4.1 <少人数できめ細かな指導があった>

というものがある。例えば、「少人数の学生に対してていねいに教えてもらった」「学生一人ひとりの顔と名前を覚えてくれていた」「学生一人ひとりの課題について個別に指導してもらえた」などである。また、

4.2 <話し合いが大事にされていた>

というものがある。例えば、「対話形式の授業であった」「ディスカッションや質疑応答の機会が設けられていた」「教官と討論する機会が多くある」などである。さらには、

4.3 <班学習の形が取られていた>

という具体的な活動形態を挙げるものがある。例えば、「班ごとに実験してレポートを書いた」「班のテーマを決めて皆で調べ発表した」などである。これらに加えて、

4.4 <レポートにまとめることが大事にされている>

といった形のものもある。自分の考えをまとめて整理してみる機会があることは、その時はしんどくても、後になってみると自分の学習にとって有意義だったと思うのであろう。これは具体的には、「毎週必ずレポートを出さなくてはならない」「年に何回かレポートをまとめる」などがある。

活動形態に関しては、教官の側の具体的な工夫や準備のあり方に言及するものもある。これは、

5.0 <よく工夫され準備された講義等である>

と括っておくことができるであろう。この中には、例えば、

5.1 <よく計画され準備されたものであった>

という形で括らざるを得ない一般的なものがある。具体的には、「講義の組み立てに計画性・目標意識が感じられる」「良く準備された講義であった」などというものである。これに加えて、非常に具体的なレベルで

5.2 <講義等の際の手段・方法が良かった>

ということを指摘するものがある。例えば「ビデオを使って具体的な映像の形で示してくれる」「スライドで分かりやすく説明してくれる」「マンガをつかって教えてくれた」「きちんと内容をまとめて板書してくれる」などである。

【講義・演習等にどのような不満・注文があるか】

以上に見てきたように、学生たちは自分の受けてきた（いる）講義等に対する満足感のよってくるところをさまざまな方向から指摘してくれているのであるが、これと同時に失望感や不満についてもさまざまな形で述べてくれている。特に項目<1-8>に対する回答としては、具体的なカリキュラム編成等についての注文が数多く見られる。しかしここでは具体的個別的なものは避け、今後における大学での教育や指導について一般的な形での希望や注文として述べているところを中心に見てみることにしたい。

学生からの不満や注文の内容として、教官自身のあり方に関するものが圧倒的に多く見られる。これをここでは、

9.0 <教官の反省・自覚を求めたい>

という形で括っておくことにしよう。この中でまず目につくのは、何らかの形で

9.1 <教育者としての自覚を持ってほしい>

と注文するものである。例えば、「自分の世界にひたひただけでなく、学生のための講義をしてほしい」「もっとやる気を出してほしい」「研究者である前に教師であってほしい」などという注文である。

これに関連して、講義等のやり方がおざなりだという批判も多い。これを、

9.2 <もう少し工夫して講義等をしてほしい>

という形で括っておくことにしよう。これは例えば「ひたすら先生が読みしゃべるだけ」「お経みたいな講義は嫌」「みんなに分かる言葉づかいをしてほしい」「もっと学生の反応をみながら講義をしてほしい」「ていねいに板書してほしい」「つまらない講義のくせに出席重視というのは困る」「講義の下手な教官が多過ぎる」「基礎的な用語については解説して使ってほしい」「講義についてのオリエンテーションをもっとやってほしい」などという多様な批判である。

さらには、学生に対する態度についての不満の声もある。こうしたものとしては特に、

9.3 <学生を見下すような態度はやめてほしい>

といった注文が多い。具体的には、「学生をバカにするような態度が見られる」「見下ろすような態度をしないでほしい」などである。

これらに加えて、教官の個人的性癖や性格的なものについての批判がある。これは一応、

9.4 <日常的な態度を反省してほしい>

と括ることができるであろうか。これは例えば、「時間的にルーズである」「中途半端な感じである」「融通がきき過ぎる教官と融通の全くきかない教官がいる」などである。

そして、教官との間に人間的で教育的な関係そのものを求めるものとして、

9.5 <学生ともっと密接につきあってほしい>

という趣旨の声も少なくない。例えば、「一部を除き、教官と学生の関係が希薄なのは残念である」「学生がどんどん偉い先生のところへ出入りできるような雰囲気になってほしい」などである。

【学生の理解適度について】

最後に、学生が講義等をどの程度まで理解できているかについて、簡単に触れておくことにしたい。大学ごとに、また学部ごとに相違があるのは当然であるが、京都大学の場合には、

「よく理解できる」が1・2回生で12%、3・4回生で4%、
「大体は理解できる」が、1・2回生で42%、3・4回生で56%、
「時々理解が困難」が、1・2回生で42%、3・4回生で36%、
「多くは理解が困難」が、1・2回生で4%、3・4回生で4%、
であった。大阪大学の場合には、

「よく理解できる」が、1・2回生で22%、3・4回生で4%、
「大体は理解できる」が、1・2回生で54%、3・4回生で67%、
「時々理解が困難」が、1・2回生で12%、3・4回生で25%、
「多くは理解が困難」が、1・2回生で12%、3・4回生で4%、
であった。大阪外国語大学の場合には全員が1・2回生であり、
「よく理解できる」が、7%、
「大体は理解できる」が、50%、
「時々理解が困難」が、34%、
「多くは理解が困難」が、3%、

他は無回答であった。

大学ごとに回答者数も異なり、調査対象学部も異なるので、ごく大まかなことしか言えないが、京都大学、大阪外国語大学では、一般に、1・2回生に対して提供する講義・演習等の内容や方法を学生に容易に理解できるものとするよう、なお一層の努力が必要とされるのではないだろうか。

この調査に対する回答の中には、ごく少数ながら学生自身の反省の言葉が書かれている場合もあり、心強く感じられる。例えば、「学生自身が変わらなければ大学は変わらない」「学生として努力しなければならないと考えるようになった」「学生がもっと自主的に勉強するようにならなくてはならない」などである。講義等の理解状況を改善していくためにも、もっと一般的に大学の教育活動の改善、改革をはかっていくためにも、結局のところ、教官と学生という両当事者がそれぞれ反省し、それぞれの立場で努力していくことが不可欠であろう。教官としては、この意味において、本小論にまとめてみた諸点について自分自身のあり方を振り返り新たな工夫・努力をおこなうと同時に、折に触れて学生諸君の自覚を促していくことを考えていかねばならないのではないだろうか。